

はじめに

奈良市教育委員会では、西九条佐保線道路建設事業に伴い、令和6年度から事前の発掘調査を実施しています。この度、ある程度遺跡の様相が明らかになってきましたので、周辺住民の皆様へ調査成果を知っていただくため、この現地公開を開催させていただきました。

平城京跡第816次調査は、道路建設事業地の最北端部分にあたります。この調査では、奈良時代の平城京跡の道路の跡と宅地、さらに古墳時代や弥生時代の遺構も見つかっています。

奈良時代の調査成果

左京七条三坊九坪の調査（平城京跡第806・816次調査）では、調査地北端で、六条大路の南側溝、西側で南北道路の東三坊坊間路とその東側溝、南端で七条条間北小路とその北側溝が見つかりました。大路は坊と呼ばれる約500m×500mの区画を囲む大規模な道路です。六条大路は平城京を東西に通る北から7本目の大路で、過去の調査で幅15mであることがわかっています。東三坊坊間路は坊を東西に二分する幅8.5mの中規模の南北道路です。さらに坊を4等分する位置に小路と呼ぶ幅6～7mの小規模な道路を設けて区画された、約125m×125mの坪と呼ぶ区画があります。坪の中はさらに柱列や溝で細分し、官位によって広さが異なる宅地に分けられます。

調査では、東三坊坊間路の路面上で二つの土師器甕の口を合わせて埋納した土器埋納土坑、東三坊坊間路の東側、左京七条三坊九坪の宅地で奈良時代の建物27棟、門4脚、井戸4基、橋1脚、柱列や溝の区画施設が出てきています。

九坪の宅地は坪の中央を東西溝により南北に分けられ、その南北で宅地の様相が大きく異なっていました。北側には宅地1・2、南側に

は宅地3～5があり、それぞれの宅地境には掘立柱列の区画施設があります。

北側の宅地は、南側と比べると建物の規模や柱穴が大きく、道路と宅地の間に塀などの区画施設を設けています。区画施設の中を通る雨落ち溝の西側は石組の暗渠になっていました。宅地1は宅地2～5より広く、倉庫となる総柱建物が複数見つかっています。

南側の宅地3～5は1～3棟の建物と井戸1基を持つ小規模な宅地で、3時期の変遷が見られます。道路側溝に近い位置まで、建物が建てられ、門があるものの、明確な区画施設は確認できませんでした。

九坪の宅地規模については南北方向は坪内を1/8～3/8に分割した長さであることがわかりました。東西方向の長さは確認できていませんが、九坪中央には南北に東堀河が通っているので、450～2700㎡の規模であったことがわかりました。

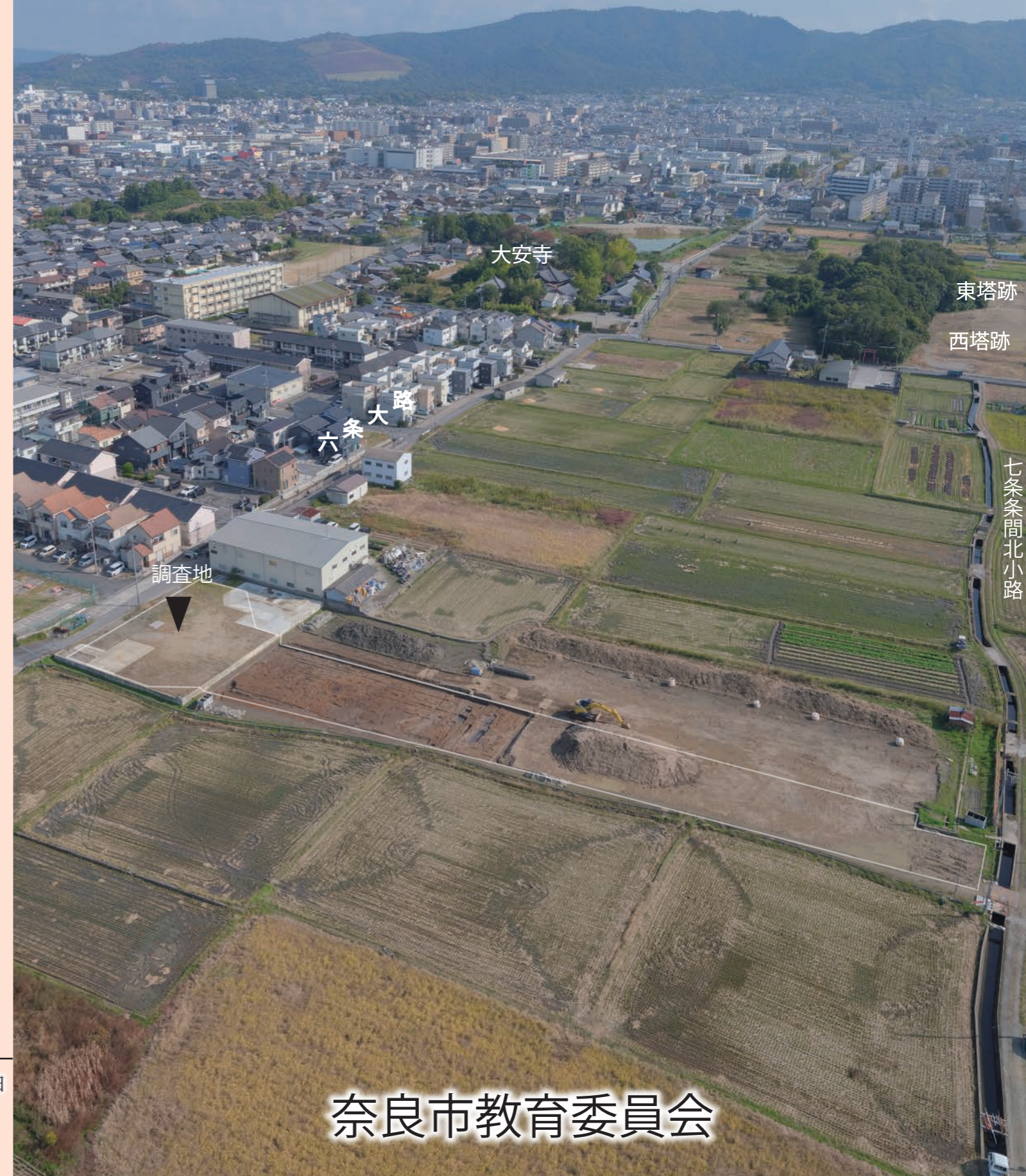
弥生時代から古墳時代の調査成果

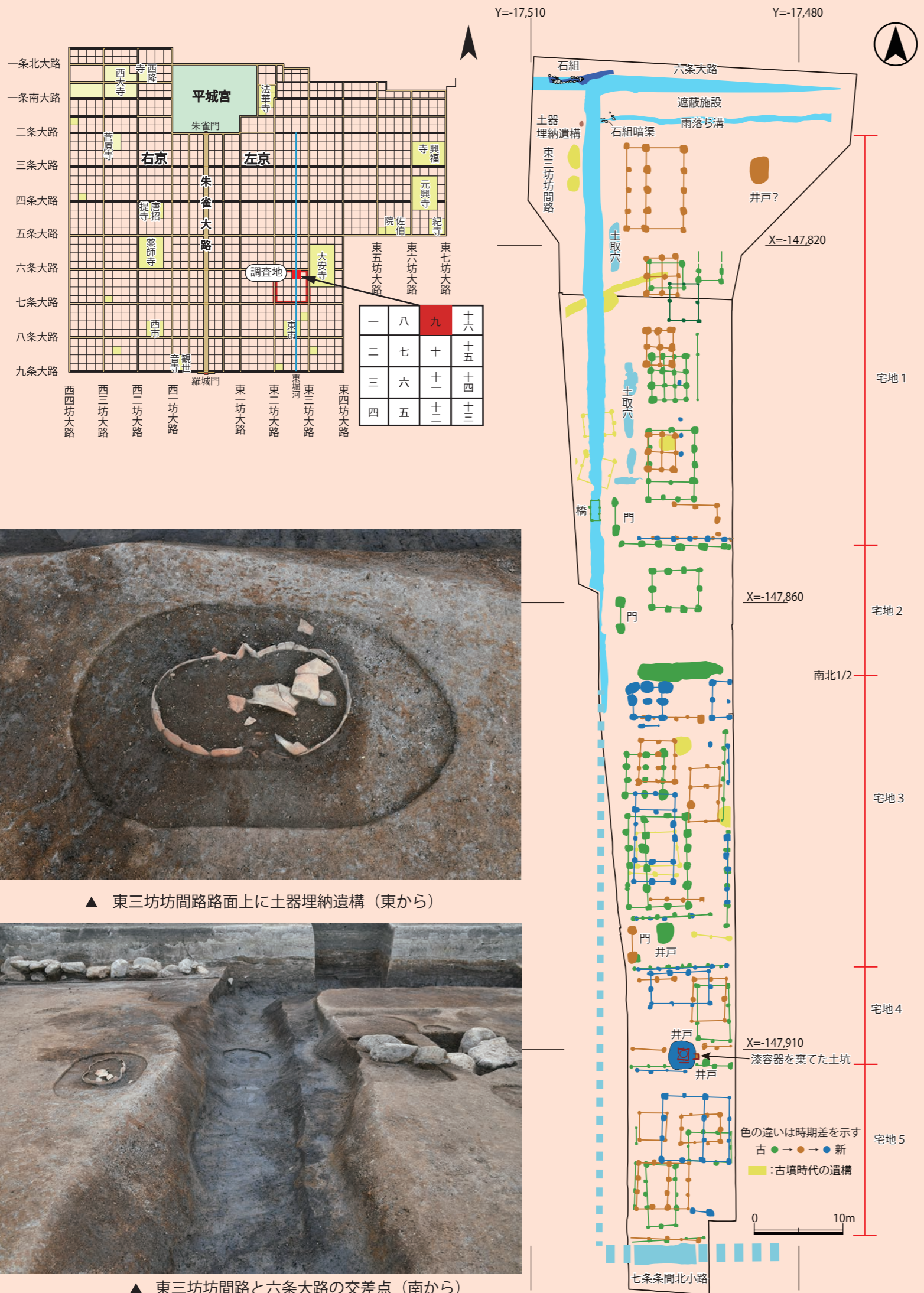
今回の調査では奈良時代の地面と同じ高さで古墳時代後期から終末期の建物や井戸、10～20cm下で弥生時代後期から古墳時代前期の土器が出土した土や溝、50cm下で弥生時代前期から中期水田が見つかりました。

まとめ

今回の調査の大きな成果は、六条大路・東三坊坊間路・七条条間北小路を検出し、道路の傾きや九坪の南北の長さが確定しました。九坪内の宅地の大きさが下級役人が暮らす1/32町から3/16町（450～2700㎡）規模である可能性が高くなりました。また、平城京ができる以前の弥生時代には水田、古墳時代には集落があったようです。平城京の立地や都市計画を考える上で重要な情報が得られました。

平城京跡第816次発掘調査現地公開資料 (左京七条三坊九坪・六条大路・東三坊坊間路)





遺構配置図 1/500

▲ 九坪南半の宅地 3 ~ 5

▲ 高杯が出土した古墳時代の土坑 (東から)